麦茶用途の大麦に適した栽培技術習得支援

湖北農業普及指導センター

【普及活動のねらい・対象】

JA 北びわこ管内では、小麦から大麦「ファイバースノウ」への麦種転換が、平成 30 年産より進められてきました。管内の一部では平成 28 年産から大麦栽培が行われていましたが、ほとんどの生産者は初めて大麦栽培に取り組む状況でした。当センターでは、大麦生産者を対象とし、高品質な麦茶用大麦の安定生産を目的に、本種に適した栽培技術の習得を支援してきました。

令和元年産までの活動で、大麦は小麦に比べ、排水対策や赤かび病防除を徹底する必要があることなど、栽培技術が一定習得され、令和元年産の単収は 402kg/10a と高水準となりました。一方、香りの優れる麦茶製造に重要なタンパク質含有率の確保が課題として残り、令和２年産はタンパク質含有率の向上に効果的な生育後半の実肥施用を徹底する活動を展開しました。

写真　JA と連携して大麦ほ場を調査

【普及活動の内容】

令和元年産は、暖冬で大麦の生育が早まり、生育量が旺盛となり、全量基肥体系では生育後半の肥料不足が生じ、タンパク質含有率の低下につながりました。

令和２年産も同様に暖冬であったため、生育に応じて実肥が適期に施用されるよう現地指導を行うとともに、当センターホームページや SNS を活用し、タイムリーな情報発信に努めました。また、JA と連携して大麦ほ場を調査し、生育後半の葉色低下の状況を共有することで、実肥の必要性に対して意識を統一し、JA と協力して情報発信を行いました。併せて、生産者に対し実肥を恒常的な技術として定着するため、これまで「専用の緩効性肥料を用いた全量基肥体系では実肥が不要」と記載されていた JA の栽培暦を、「暖冬年では実肥施用が必要である」旨を追記するよう、掲載内容の提案を行いました。

【普及活動の成果】

麦種転換は令和２年産で全面転換（約 765ha）が完了し、単収は 443kg/10a と令和元年産を超える水準となりました。一方、タンパク質含有率は、当センターの働きかけや JA からの情報発信が行われましたが、目標値の９％を達成した生産者の割合は 53％に留まりました。

実肥実施率も 53％と改善の余地があるため、今後は改訂された栽培暦等を活用し、栽培技術の定着に向けて支援を継続します。

◎対象者の意見

単収とタンパク質含有率の両立が課題。今後も品質向上に努めたい（生産者）。